

ぜひ、ガイドを  
お願いしてみよう。  
旅が楽しくなるぞ!



(一社)松江観光協会美保関支部 認定ジオガイド  
朝倉 功さん

## 地域の風土・文化をベースに美保関の魅力を多彩に発信

美保関のジオサイトを案内するツアーの列の中でも頭一つ抜きん出て、その背の高さが格好の目印のような朝倉さん。観光協会で働き始めて6年ですが、それ以前からも人気イベント「海上綱引き大会」など地域づくり活動に数多く関わってきました。2015(平成27)年4月に観光協会支部が七類地区から美保関地区に移転した時に、当時の事務局長へ「観光誘客を行うにはいずれマンパワーが足りない時が来るので、その時はお声掛けください」と朝倉さんが話していたのがきっかけとなり、後にご縁がありこの道に入ったそうです。2017(平成29)年の日本ジオパーク認定を受け、町内の地質サイトをまちあるきガイドへ活かし、新たな魅力を伝えようと研修を受け認定ジオガイドになりました。

美保関町には大陸から日本列島が分離したときの地層が見られるオの海食崖、美保関灯台、青石畳通りなど多くの地質サイトがありますが「松江市観光戦略プランの表紙になった惣津明島宵祭りやSNSでプライベートビーチのようだと話題となった笹子海岸などあまり知られていない見所もあります」と地元ならではの視点を大切にしています。ガイドは某テレビ番組「ダーツの旅」の第一村人のようなもの。地域の窓口としてホスピタリティの高い旅人の印象に残る案内をし、また来たいと思ってもらえるように心がけている」と自らのガイドスタイルを位置づけます。

「美保関には19の浦々があり、それぞれに祀る神様、各々の祭りごとや風俗があります。人口減少や担い手不足で地域文化が途絶えてしまう危惧があるなか、美保関は地元の人々の努力によって継承されています。そうした風土・文化をジオの地史とあわせて伝えていきたい」と話していただきました。



朝倉ガイドの知識は多岐にわたるだけでなく、その軽妙な語り口は訪れる人を楽しませています。

## 島根半島・宍道湖中海ジオパークの地質・地形の特徴② <全3回>

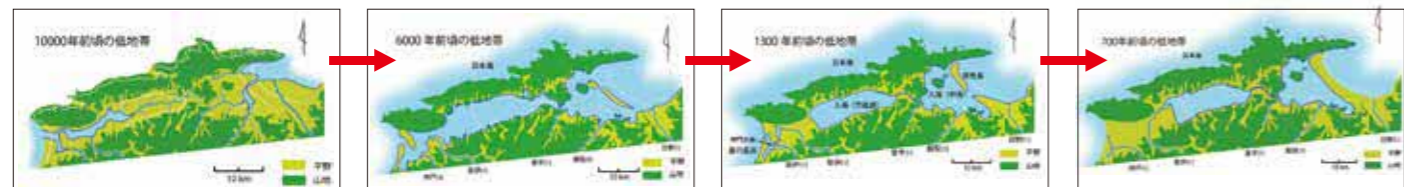
解説:野村律夫(ジオパーク専門員、理学博士)

島根半島・宍道湖中海ジオパークは、大きく見ると3つのエリアに分かれています。そのエリアを地質という視点で見るとそれぞれの個性が浮かび上がってきます。レガシーという言葉があります。人間の遺産や伝統が過去から受け継がれるものという意味ですが、同じような意味で、特徴的な自然が資源として受け継がれる場合はヘリテイジと呼びます。私たちのジオパークも大地の個性をもっと明確にするために、ヘリテイジと呼ぶようにしています。3つのヘリテイジがそれぞれの地域の文化や生物生態を生んでいるのです。



### ②宍道湖中海ジオヘリテイジの成り立ちと特徴

宍道湖中海低地帯は、出雲平野から弓ヶ浜半島まで約60kmにもわたって平野と汽水湖が広がる大地です。およそ1000万年前、島根半島の一角が隆起して陸地となったときに、中国山地の北縁域との間に東西に長い窪地ができました。この窪地が今の低地帯の原形です。この低地帯は海面からの高度差が小さかったため、今から260万年以降の第四紀という地質時代特有の海面水位の上がり下がりの影響を強く受けました。とくに1万年前から現在までの低地帯の形成史をまとめた松江誌より最近の成果を入れると、次のようにまとめられています。



10000年前の低地帯は、今の出雲平野から宍道湖の西の端にかけて大社湾につながる細い水域が広がっていました。今の宍道湖の西端に近いところでは汽水性の環境でしたので、今の大社湾の海岸近くまで海域になっていたと考えられています。

約7000~8000年前の低地帯は、海が海面下に置かれましたが、斐伊川や神戸川によって運ばれた土砂が低地帯に流出しました。また海面が少しずつ低下してきたため、6000年前頃になると河口付近には三角州や砂州ができて、出雲平野や弓ヶ浜半島の原形が姿を現すようになりました。

約1300年前までに、出雲平野は西側に神門水海を形成して大きな平野となりました。斐伊川は基本的に神門水海に流れ込み湿地帯をつくっていました。一方の中海側は、夜見島と呼ばれる島が大根島の東にできて、江島との間は馬で行き来できたといえます。まだ弓ヶ浜半島はできていませんでした。

宍道湖の湖岸線は西の方へ広がっていましたが、700年前頃にはそれまで西側へ流れていた斐伊川が宍道湖側へ定期的流れ込むようになりました。この斐伊川の東流によって江戸時代になると、カナ流の影響を受けて出雲平野の拡大が一段と進みました。同じように、弓ヶ浜半島でも日野川から流出した土砂が付け加わり半島がますます大きくなっていきました。

# ジオパーク通信

2024.11  
Vol.9



出雲国風土記の  
自然と歴史に出会う大地

- 協議会会員の紹介 宍道湖魚類研究会 / ジオサイト紹介・手結のスランプ褶曲 ..... 1
- 新種の深海魚「シンジエンシス」 ..... 2
- ジオパーク推進協議会の活動 / 土佐清水ジオパーク紹介 ..... 3
- ジオガイド紹介 / 島根半島・宍道湖中海ジオパークの地質・地形の特徴② ..... 4

## ジオパーク推進協議会会員の紹介 宍道湖魚類研究会

### 宍道湖・中海の水生物や水質を長年にわたり調査研究



宍道湖魚類研究会 代表  
ジオガイド  
桑原 弘道さん

「宍道湖魚類研究会」は宍道湖・中海やその流入河川で、調査・研究や環境学習等に携わる人々の情報提供や意見交換の場として2001年に設立されました。現在の主な活動としては宍道湖の桁網漁の漁獲調査(1995年からNPOやその前身の島根野生生物研究会が行っていた調査を引き継ぐ)を行っており、宍道湖大橋南詰の漁師の荷揚げする漁獲物をみせてもらい話を聞き、主要魚種の年変化や希少生物等の捕獲状況を調べています。

設立時から代表を務める桑原さんは宍道湖・中海の生態系の変遷については多様で不確定な要素があり「アマサギもシラウオも冷水を好みますが平成7年頃に高温の湖水となりその後漁獲量が激減しました。アマサギはそのほとんど漁獲されなくなりましたがシラウオは復活しています。かつて大量に獲れていたセジボロも今ではなくなり、中海では堤防開削後にアジやワタリガニが増えた一方、ハゼなどの底生魚類が酸欠で減少しました。また宍道湖ではタツノオトシゴの仲間である汽水性のサンゴダツが住処の水草が増えたことや中海の水位が上がり塩分の濃い中海の水が入ってきていることから増えています。来年もそうとは限りません」と長年の調査で得た実感を感じ語ります。

また桑原さんは学校や公民館等での環境学習でハゼを自分たちでさばき唐揚げにして食べる活動にも力を入れています。「命をいただいていることを実感し食べ物を粗末にはいけないと感じてもらおうと共に、水辺に近づく、水辺に親しむことで環境への意識を持ってもらいたい。宍道湖の汚れの原因となる有機物は雨水と共に陸から流入し、その有機物を食物連鎖で体内に取り入れたハゼを釣って食べることが宍道湖の水質浄化にもつながります。地域の自然の中で活動したことは大人になっても良い思い出になり、愛郷心を育ててもらえると思っています」と話していただきました。

## 地質サイト見どころ紹介 シリーズ9 手結のスランプ褶曲



2024(令和6)年8月9日  
松江市指定文化財(天然記念物)に指定!

地質サイトに指定している手結のスランプ褶曲は、約1600万年前の海のなかで起こった地すべりや土石流によって、海底の砂や泥からなる砕屑物が深海へ運搬される過程で形成された地層です。未固結の火山性砕屑物が海底斜面を流れ下る際に、泥岩からなるこの地層は出来立ての餅のように粘着力があるために、柔軟に変形して、まるで大蛇がうねるような地層になりました。世界的にも珍しい形状をしています。この海底地すべりの原因としては、地震や海底火山活動があげられます。

私たちが直接見ることができない深海底で起こった地層の変形の様子を、陸上で観察し理解することのできる格好の学習素材です。見やすい場所にありますので、ぜひ現地に出かけて観察してみてください。

地質遺産の松江市指定文化財への指定は初めてのことであり、指定されたことでその学術的価値を広く周知できるとともに、将来にわたって適切に保全されていくようになります。



鹿島町手結の寺島から臨んだ遠景。港から歩いてすぐのところにあります。



※貴重な地質遺産を将来にわたり保全していくため、むやみに地層を削ったり、石を持ち帰るなどの行為は止めましょう。



### 編集後記

今年7月の大雨の影響で全面通行止めとなっていた日御碕について、9月から仮設迂回路が開通し、観光客等を含む一般車両の通行が可能となりました。開通期の冬季に観光客に来てもらうため、島根県は、11月から宿泊料金の割引や飲食・土産物などで使えるクーポン券を発行するキャンペーンを行っています。1月には日御碕の経島付近の海にうみねこがやってきます。この機会に日御碕に出掛けてみてはどうでしょう。

発行者: 島根半島・宍道湖中海(国引き)ジオパーク推進協議会

【松江市役所 文化振興課 ジオパーク推進室】  
〒690-8540 島根県松江市末次町86番地  
TEL: 0852-55-5399  
E-mail: kunibiki-geopark@city.matsue.lg.jp

【出雲市役所 政策企画課 プロジェクト推進室】  
〒693-8530 島根県出雲市今市町70番地  
TEL: 0853-21-6079  
E-mail: project@city.izumo.shimane.jp



島根半島・宍道湖中海ジオパーク 日本ジオパークネットワーク

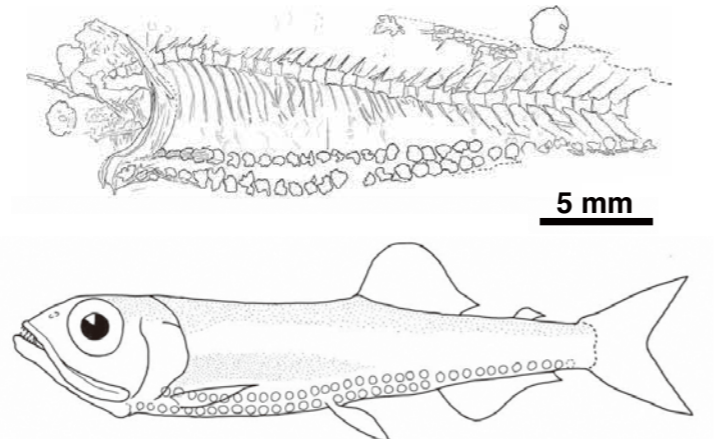
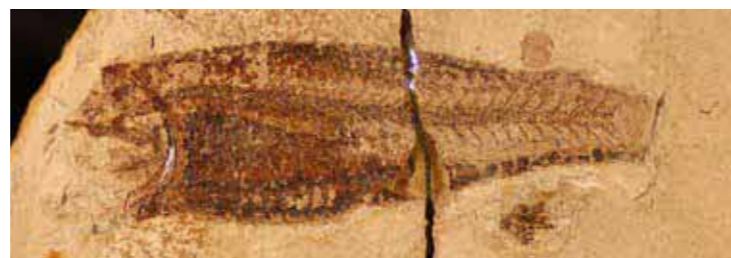
# 深海魚「シンジエンシス」が新種として認められました (島根県の魚化石としては新種認定第一号です)

シンジウキエソは今年(2024年)新種として発表(記載)された日本初のウキエソ属魚類の化石です。学名は *Vinciguerria shinjiensis*、学名の日本語読みはヴァインシグエリア・シンジエンシスです。ウキエソの仲間(属)はわずか数センチの深海魚で、体にたくさんの発光器があります。かれらは中深層(水深200~1000m)という海にすんでいて、昼間は200mよりも深いところに、夜になると水深50~500mの比較的浅いところまで上がってきます。

分類学的には硬骨魚綱ワニカゲギス目ギンハダカ科に属する魚です。ウキエソの仲間は同じワニカゲギス目のオニハダカの仲間とともに最も個体数の多い脊椎動物として知られています。世界に5種が生息しており、そのうち日本にはヤベウキエソ、ウキエソ、オキウキエソの3種がいます。ヤベウキエソは世界の温帯から熱帯の海に、ウキエソは熱帯太平洋西部以外の世界の温帯から熱帯の海に、オキウキエソはインド洋西部を除く世界の亜熱帯から熱帯の海に生息しています。

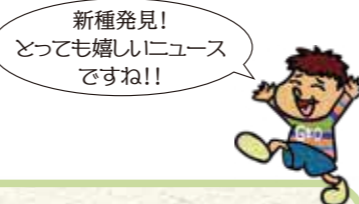
化石は4種が知られています。ジョージアの中期始新世のディスティンクタ (*V. distincta*)、コーカサス山脈とカルパティア山脈の前期漸新世のオプスクラ (*V. obscura*)、クリミア、コーカサス、カルパティア山脈の中新世のメルクリニ (*V. merklini*)、および韓国の中期中新世のオリエンタリス (*V. orientalis*) です。

シンジウキエソは臀鰭がより後方にあること、腹部の背骨が25個であるといった特徴のほか、これまで知られていない化石も含めたウキエソ属魚類とは発光器の数で異なります。



(上)シンジウキエソの化石  
(中)化石のスケッチ  
(下)シンジウキエソの復元図

やぶもと よしたか  
藪本 美孝 北九州市立自然史・歴史博物館名誉館員



## シンジウキエソの発見の経緯

この化石は1980年代に、宍道町佐倉から鏡に通じる峠の南にある小道横の崖から発見されました。中学校教員による理科教育の夏季研修会で訪れた時のものです。10人ほどの先生方が参加されていたなかでのできごとで、当然、この魚化石はなんだろうか、ということになりました。地質古生物学を専門にしている私としては、たぶんニシン科の魚だろうが、詳しいことは魚化石の専門家に聞いてみましょうというて、その場をスルーした次第です。そして、島根大学へ持ち帰って、2017年の退職間際まで保管したままだったのです。

山陰中央新報にこの化石が古生物学の国際誌に新種として記載されたことを報じてもらいましたが、早速、同紙の「こだま」覧に40年も前に発見されながら今になって種名が記載されたことが不思議だ、といった感想が読者から寄せられました。もし私が読者のような化石マニアだとすると、同様な感想を持ったに違いありません。それには1980年代中頃まで、魚化石だけでなく脊椎動物化石全般にある事情があったのです。

脊椎動物化石というと、恐竜化石のようにたいへん人気がありますので、研究者も多くいると思うかもしれません。しかし、野外での発見の機会のごく希なことではかありません。そのため、業績評価の研究環境下では対象になりにくく、当時の大学には魚化石を専門にしている人はいませんでした。また、当時は科学博物館も少なかったのです。そのようなことがあって、何十年の間、倉庫入りしていたわけです。

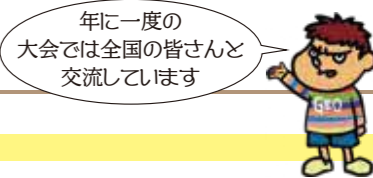


1980年代後半になると、全国的に科学博物館が設けられるようになり、脊椎動物化石を専門にされている学芸員も多くなりました。藪本先生は博物館に長く勤務され、国内の魚類化石を網羅的に研究されている第一人者です。ちょっと気になっていた魚化石、見ていただいて光輝きました。真っ暗な深海を光りながら泳いでいた深海魚だったとは…。皆さんも、1600万年も前の来待大森の大地が深海であったことを想像してみてください。

このたびは、新種として認められた島根県の魚化石で第一号となったこと、そして宍道という地名を冠する種名(和名ではシンジウキエソという)に、地域の皆さんには嬉しいニュースになりました。

野村 律夫 島根大学名誉教授・ジオパーク専門員

# ジオパーク推進協議会の活動



## ジオパーク全国大会に参加しました

8月30日から9月1日に青森県で開催された「第14回日本ジオパーク全国大会 下北大会」に、本ジオパーク推進協議会から5名が参加しました。全国各地のジオパーク関係者の700名以上が集まり、情報交換や交流を深めました。本ジオパーク推進協議会からも、召古ジオガイドが「ジオパークが教えてくれる生物多様性」をテーマとした発表を行い、持続可能な社会を目指した自然や生物との共生について発表しました。若い世代もベテラン世代も、ともにジオパーク活動で盛り上げている成果が示され、たくさんの感動と刺激を受けた3日間でした。



召古ジオガイドの発表

開会式の様子

オープニングアトラクション

## 10月12日(土)に、美保関でジオトレッキングツアーを開催しました。



秋晴れのもと、小学生から大人まで15名の参加者が五本松公園入口を出発し、ゆったりとしたペースでトレッキングを開始しました。ガイドさんの楽しい解説を聞きながら、美保関の地形や歴史について学びました。参加されたみなさまは途中五本松公園からの景色を楽しんだり、済んだ空気や鳥のさえずりに癒されたりして、美保関の自然を満喫されている様子でした。下山後は美保関の旅館で昼食を堪能し、エネルギー補給。その後美保関灯台などを巡り、全員無事にツアーを終えることができました。参加者のみなさまの笑顔や美保関の自然の美しさに元気をもらった1日でした。「また参加したい」とのお声もいただき、今後も楽しい企画をお届けしたいと思います!

# 土佐清水ジオパーク紹介



## —黒潮と共に生きる— 漁師が生まれる大地の物語

土佐清水ジオパークは、四国の南西部に位置する高知県土佐清水市全域がエリアとなっています。このエリアでは、盛り上がる大地に黒潮がぶつかって豊かな漁場や暖かな気候がもたらされます。お刺身で食べられるほど新鮮なブランド魚、「土佐の清水さば」、アコウや、ソテツなどの南国植物など、漁師町の人々の暮らしや亜熱帯の植物などが楽しめます。土佐清水の盛り上がる大地の成り立ちには、2つの重要な特徴があります。



**土佐の清水さば(刺身)**  
土佐清水で水揚げされるゴマサバのことで、立縄漁法という独特の漁法で一匹、一匹大切に釣り上げられます。モチモチした歯ごたえのある食感で、地元ではこの食感を「ビリビリ」と表現します。

### ●電串海岸

電串海岸で見られる地層は、日本列島が大陸から分かれた1,700万年前に浅い海でたまったもので、地震、津波、海底地すべりの痕跡など当時の大地の変動をよく記録しています。また、岩石が潮風や波に洗われてきた風化構造などが、複雑な形の奇岩をつくっています。

### ●足摺岬のラバキビ花崗岩

足摺岬で見られる「ラバキビ花崗岩」は、地下深くで固まったマグマが大地の隆起によって地表に出てきたものです。ラバキビ花崗岩は、世界的には主に北欧などの5億年よりも古い大陸に存在し、日本のような新しくできた大地にはほぼ見られない岩石です。



ラバキビ花崗岩

ラバキビとは、フィンランド語で「崩れやすい石」とのこと。こちらの花崗岩は、Aタイプ花崗岩に分類され、この種類は、日本では足摺岬だけで見られます。(解説は、日本地質学会HP 県の石 高知県)より



電串海岸

激しい波や風の風化浸食によって形作られた奇勝奇岩が楽しめます。